

## 初等音楽

音楽教育講座・田邊 隆

### 1. 授業の概要

この授業は、学校教育 2 回生後期の授業で、履修希望者に対して音楽科教員が均等の人数で担当している。全クラスの条件として、(1)規定の出席数、(2)半期での合格数は 7 曲以上、(3)試験として「伴奏 1 曲」「弾き歌い 1 曲」を課している。

本クラスでは、履修者の音楽歴に差があるため、個々の学生の実態に沿い、個別指導を主体として、ピアノ伴奏や弾き歌いを中心に指導した。演奏の振り返りについては、「YAMAHA : Piano Control unit PPC500R」の再現機能を活用して、自らの演奏に傾聴出来るように、履修者に対し適宜フィードバックを行った。特に読譜に慣れない履修者については、コードネームによる伴奏を説明し、その演習を勧めた。

### 2. 音楽歴・合格曲・授業外の学習時間

この授業は、受講前の音楽経験が達成度に色濃く影響する科目である。fig.1 は、半期間で合格した曲数を基にした一覧である。また fig.2 は、各調査項目間の相関係数を示したものである。ピアノ歴は無いが、その他の音楽経験が 7 年間ある履修者 E に

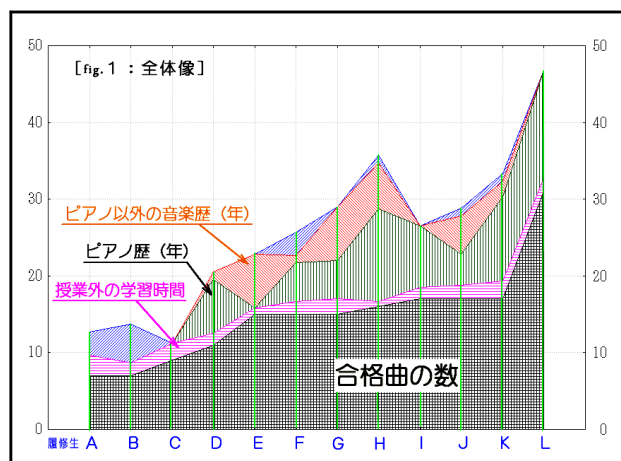


fig.2 相関 有意確率(強調表示)  $p < .05000$  N=12

| 変数      | ピアノ経験年      | ピアノ外経験年 | 授業外学習時間      | 合格曲数        | 欠席    |
|---------|-------------|---------|--------------|-------------|-------|
| 男・女     | -0.55       | 0.10    | 0.06         | 0.55        | -0.37 |
| ピアノ経験年  | 1.00        | 0.01    | -0.21        | <b>0.77</b> | -0.39 |
| ピアノ外経験年 | 0.01        | 1.00    | <b>-0.51</b> | 0.11        | -0.34 |
| 授業外学習時間 | -0.21       | -0.51   | 1.00         | -0.21       | 0.23  |
| 合格曲数    | <b>0.77</b> | 0.11    | -0.21        | 1.00        | -0.48 |
| 欠席      | -0.39       | -0.34   | 0.23         | -0.48       | 1.00  |

代表されるように、ピアノ経験数によらず、成果を上げる事例も、希ではあるが毎年見られる。しかし、fig.2 で示すように、当然のことながらピアノ経験年数と合格数との相関が高い ( $r=0.77$ ) など、経験上の認識を裏づけるだけの結果であった。

授業外の学習時間については、音楽経験が多いほど、授業外学習時間は少ない傾向 ( $r=-0.51$ ) を示し、音楽歴の少ない履修者の中でも、将来、小学校教師志望学生の方が、中・高等学校教師志望者より、合格曲数が多い傾向にあった。小学校では、全科指導が前提という認識が、影響しているものと推測する。

### 3. 学習への支援

音楽経験が少ない履修者への学習支援は、本科目の課題の一つである。音楽は、入学時に試験内容として課されていない分野だけに、将来教職に就くことを想定し、授業内容・方法の検討が求められている。

今回は、全員のカルテを作成し、個々の進捗状況を紙面と音源の両方で記録し、質問や進捗状況の確認を増やすために、ティーチングアシスタントを活用した。その中で、希なケースではあるが、前述 E の事例の中に、改善のヒントはあると考えた。

E に対しては、ピアノに関する初心者として、ピアノの細かな奏法にこだわることなく、まず、本人自身の曲想確認、そして本人の曲想から鍵盤上へ意識を移行させることを配慮した。1 週間に 1 曲の合格数を目標としたが、目標を上回る (平均 1.25 曲/週) であった。後半は、次第に細かい表現方法について取り扱うように配慮した。

一方、経験が豊富な履修者に対しては、質と量の両者を目標とさせ、授業外学習時間の確保を促した。履修者 I・J・K の平均は (1.33 曲/週)、L は (2.58 曲/週) であるが、これ以上、授業内の対応は限界である。さらなる授業の効率化を考えるならば、事前録音の提出等があげられる。